



佐  
鏡  
誤

夜  
光  
珠  
則

十武9  
285  
2止





武中  
第 28 卷  
止

俗説正誤夜光珠中巻目録



天狗の丸つるとふりの説

初下

雷かみなり八十二やま附つきのの會あひまひの形かたち一ひと作つくてあるといふ説

四下ヲ

時とき夜よとふ傷やまをのりといふ説

七下ヲ

籤せん筋すぢ乙おつ乃の符ふの説

八下ヲ

門かどの上うへは蟹かにの甲かぶつとある説

九下ウ

南みなみ天てんと蒜にんにくと戸との上うへはある説

十下ヲ

蒸ひき菓子こに柏かしわ葉はとある説

同ウ

揚は骨こつ木こハ魚いさなの毒どくと決けつとといふ説

十一下ヲ

正誤夜光珠 巻之目録



五言石玉 卷之四 目録  
葵の葉の黒焼と秋の葉といふ説

十三丁ラ

薬菟ハ砂と下といふ説

同ウ

药菟の芥子齋ハ秋の葉といふ説

同ウ

海常と痔乃葉といふ説

十四丁ラ

蜀黍と淋病の葉といふ説

同ヲ

痔と淋病ハ冷より熱といふ説

同ウ

淋病は茶と忌むといふ説

十五丁ラ

菡ハ山楸の葉と滑といふ説

同ウ

紙菴の氏子ハ黄凡と禁するといふ説

十六丁ウ

麩の核と喰つる鼠ハ人と嚼むといふ説

十七丁ラ

猫ハ名貝と喰ハとれ耳ある説

十八丁ラ

黒猫と秋の葉といふ説

同ウ

男女の核はたそくのうりわるといふ説

同ウ

秋の葉は秋の葉と秋の葉といふ説

十九丁ラ

氣淋と滑濁といふ説

廿丁ラ

髪は喰く无くと地盤は紙といふ説

同ウ

内赤の後の腐ると内換といふ説

同ウ

濕と次といふ説

廿丁ラ



牛蒡方と狸おの毒といふ説

廿三下

牛蒡ハ陽乃と記し煮炸ハ腎と海丁ると云説

同ウ

ふろは商陸と用ゆり説

廿三下

咽骨のつら方に風仙死の子と用ゆり説

同ウ

入辛のたぐいと食ひては臭さといふ法

廿三下

塩おの塩守と魚よ出さ法

同ウ

萩光珠中き目錄 終

俗説正誤萩光珠巻之中

浪華原省庵若一子輯録

天狗の爪といふおの説

せろにち物の爪といふおわり所々の深山幽谷にて

蹄は拾ひひらきといふお状小三六一二寸大さありハ三

四寸お厚く末尖る支後又のごく短めて硬く至

し臭白く末ハ毒悪くして光はわり又蹄の鬚は

似て斑あるも何り表ハ甲言く裏ハ平あり本のと

まりハこら陶器の茶をうけおし方拾て松茸



の根の欠わひは似たり是を天ぐの凡とのとゞひ  
つて何の成りおとらざるを知らず或人  
のつらふは雷の音方迎まるはそちの地を踏  
てゆかぬあるは又西よそへ雷の凡とつと然るハ  
をみしらざるの疎甚きが本字拾遺は霹靂の中  
に剗刀は似たり若わり色甚きと取文つて玉て硬  
く玉のごとくといつるの雷震の後又因てはると  
われは是なるべし又西波の人のいするは縁の此何物  
津田山は雷の震方縁よそへ持くの吳おとびくり

一 種ハ長ク三寸許るち三後の撥は似て久ハ尹初の  
陶器のどのごとく葉をうして石よりも硬しと是  
すみらち張華が博物志は載るとしらの群衆斧一  
名ハ群衆揆とらふりの又甚きが群衆揆の斧刀は  
似たりりの何れとらひ又沈存中が筆談は雷の音  
より木の干にて雷揆とけり斧は似て孔たりと  
いひ又時珙が雷書と引いて夏斧ハ斧のどごと  
いするあり又一種ハ徑二寸許りて形ハ群衆の掛  
斧よかくる環のどごとく欠くありと

三ノ五ノ六ノ七ノ八ノ九ノ十ノ十一ノ十二ノ十三ノ十四ノ十五ノ十六ノ十七ノ十八ノ十九ノ二十ノ二十一ノ二十二ノ二十三ノ二十四ノ二十五ノ二十六ノ二十七ノ二十八ノ二十九ノ三十ノ三十一ノ三十二ノ三十三ノ三十四ノ三十五ノ三十六ノ三十七ノ三十八ノ三十九ノ四十ノ四十一ノ四十二ノ四十三ノ四十四ノ四十五ノ四十六ノ四十七ノ四十八ノ四十九ノ五十ノ五十一ノ五十二ノ五十三ノ五十四ノ五十五ノ五十六ノ五十七ノ五十八ノ五十九ノ六十ノ六十一ノ六十二ノ六十三ノ六十四ノ六十五ノ六十六ノ六十七ノ六十八ノ六十九ノ七十ノ七十一ノ七十二ノ七十三ノ七十四ノ七十五ノ七十六ノ七十七ノ七十八ノ七十九ノ八十ノ八十一ノ八十二ノ八十三ノ八十四ノ八十五ノ八十六ノ八十七ノ八十八ノ八十九ノ九十ノ九十一ノ九十二ノ九十三ノ九十四ノ九十五ノ九十六ノ九十七ノ九十八ノ九十九ノ百ノ百一ノ百二ノ百三ノ百四ノ百五ノ百六ノ百七ノ百八ノ百九ノ百十ノ百十一ノ百十二ノ百十三ノ百十四ノ百十五ノ百十六ノ百十七ノ百十八ノ百十九ノ百二十ノ百二十一ノ百二十二ノ百二十三ノ百二十四ノ百二十五ノ百二十六ノ百二十七ノ百二十八ノ百二十九ノ百三十ノ百三十一ノ百三十二ノ百三十三ノ百三十四ノ百三十五ノ百三十六ノ百三十七ノ百三十八ノ百三十九ノ百四十ノ百四十一ノ百四十二ノ百四十三ノ百四十四ノ百四十五ノ百四十六ノ百四十七ノ百四十八ノ百四十九ノ百五十ノ百五十一ノ百五十二ノ百五十三ノ百五十四ノ百五十五ノ百五十六ノ百五十七ノ百五十八ノ百五十九ノ百六十ノ百六十一ノ百六十二ノ百六十三ノ百六十四ノ百六十五ノ百六十六ノ百六十七ノ百六十八ノ百六十九ノ百七十ノ百七十一ノ百七十二ノ百七十三ノ百七十四ノ百七十五ノ百七十六ノ百七十七ノ百七十八ノ百七十九ノ百八十ノ百八十一ノ百八十二ノ百八十三ノ百八十四ノ百八十五ノ百八十六ノ百八十七ノ百八十八ノ百八十九ノ百九十ノ百九十一ノ百九十二ノ百九十三ノ百九十四ノ百九十五ノ百九十六ノ百九十七ノ百九十八ノ百九十九ノ百十



是すかりら雷書は出る雷環あり又一粒ハ長さ  
 四寸くくら半の角のごく又葉葉よりして末の  
 鋭くすきく不いちよよ天物の凡のごくく玉つて  
 硬さりのとこれ又雷書に齒環ハ長三尺洞感  
 のごとくとのよりのよや赤せ万よ天より降る方  
 どの云々つらむわううれも雷環の鋭ありべこを又  
 大坂の人先子安治川よて雷のからく方  
 よりゆらると一塊掌の大きさよて乾漆のごく石  
 よ似て石よわらどこれ列怖が炭表露吳の雷公雲

とらふりのをまか雷環多遊高珠号を形かれば  
 悉くは粒数ありつぎよても人それを見れば神と安  
 志と定め器おの疾と治とわらうとて本意目  
 は李時珍其そのつと辨どとのつともいまごを理を  
 するに其揚するよそれ地氣升つて雲とあるとて  
 ハ質變して氣と成る天氣降つて雲と成るとしてハ  
 象化して形と成るよとて地の氣升るの時  
 去金石の氣候りれ降つて雲と成るとして天の  
 氣の降る時よその氣雷火よ降るされて造化の

正言何物 卷之中  
 三



磁石焼むと磁石なるものあり ちいし雷契の類なるもの 天の陽の  
 故に天はなるものハ氣象として見らるるゆれども  
 實體あるものあり地ハ陰ある故に地はなるものハ形  
 質として見らるるものあり其のありはゆへに陰陽の氣  
 の升と降とする時天地の氣は親きて万の變化を  
 成してありたりよるるて邵子金書は曰く天の四象  
 ハ日月星辰地の四象ハ水火土石とされ玉として日  
 の火をとり一月の氣を成るるてあり一表秋は星  
 隕て石とありとるもは理なり 人の力もの氣と氣ハ陽と陰とあり  
 ちいし轉く血とハ陰とてこころあり

雷ハ十二寸の會の形は化して成るといふ説

僅に雷ハ十二寸の會の形は化して成るといふ  
 一決してあることあり古書は雷ハ陰陽の符として表  
 示するものありて其の端は方説ありはなるは新象の  
 群去は教ありて寓言を忘の撰述なりと然と  
 まるるより却て實理と成るにあらざるは宋儒  
 の説獨に古人の微意を察することどもを其の述  
 て其の事は詳かざる又近來天文家乃徒去は雷の  
 辨わはざるにいたる中世は愚昧するは雷ハ地

正説仙苑珠 卷之中















一、六、わ、く、ず、は、別、ち、の、傷、を、痛、の、二、半、め、傷、を、傷、也、三、  
 は、方、め、あ、り、時、疫、と、く、倍、は、疫、病、と、ら、し、時、形、病、の、こ、  
 り、て、いつ、も、そ、も、時、の、不、正、の、氣、を、感、じ、て、病、じ、あ、り、と、  
 形、熱、の、表、裏、經、絡、は、わ、づ、つ、る、亦、大、概、傷、を、く、よ、於、  
 ち、ろ、り、の、あ、り、と、て、又、傷、を、い、は、そ、の、中、を、氣、を、傷、ら、  
 ぬ、て、そ、の、時、は、病、じ、と、い、ふ、病、の、正、傷、氣、と、い、ふ、は、う、ら、は、  
 陰、志、陽、志、の、こ、う、ら、わ、り、又、そ、の、氣、を、毒、肌、膚、は、癩、れ、  
 て、表、を、へ、り、ら、う、て、病、じ、と、不、正、病、の、傷、を、と、い、  
 へ、う、ら、は、表、病、じ、と、温、病、と、い、ひ、又、病、じ、と、熱、病、と、

い、ふ、ら、れ、い、づ、き、も、陽、志、あ、り、さ、て、は、陽、志、の、傷、を、く、よ、六、  
 經、の、傳、變、表、病、裏、病、は、表、中、裏、字、の、從、り、て、を、變、  
 えて、二、百、九、十、七、法、  
仲景先生の傷を論はすまじくあり 又、李、東、垣、の、論、は、別、  
 は、勞、役、の、傷、を、と、出、せ、り、あ、り、て、傷、を、い、は、ど、の、大、病、ハ、  
 あ、り、ぬ、は、傷、を、雜、病、と、て、傷、を、く、よ、對、す、り、時、ハ、一、切、  
 の、病、と、し、て、く、雜、病、と、云、つ、り、

蕪筋この符乃説

世上は疫病の厭傷として蕪筋この三字と紙を  
 きて門口は鮫こしくわりはひり群疾採録は出ても



ろう一豫泰の南に西米後といふ所あり宋の乾元八年  
 の書一人の傍ありて後し書に告て云く追討は兩  
 云くの兵相あり者み人ありて彼等を後さる禱ひ  
 わるくしては籤籙この符とわして去つとぬ海吏  
 怪しくかりひ病るぬ果して英彩と着わや三  
 符を負つる者み人ありて舟はありととり中く品ひ  
 拒て後さずいそご海くんとわくそくは彼符と  
 見たりく出まきまごひて管笈と控迎をわつその後  
 とひくさるるよ小棺と數百入るる海吏を棺

と焚すてそ符と書て人々は傳ふそ後この後一  
 の南にわ方に浙の地ハ疫疠を有りて人か多く換ド  
 けどもゆよわつる豫泰の方ハ一人も病る者あり  
 そはろり雨くは傳りりひらまりて今には符と書  
 くの門戸は貼つて夜鬼と避くところあり魚橋するよ  
 は籤籙の二字は符は出つるのころそ外は訓籙は  
 畢竟文字にわらば符はわらば何ともせざる也是  
 すまららるく鬼と避くもの理あり符籙家の秘傳  
 云く符と書くことと會せざるは神鬼は笑







考を却らるとありてこそ其功効おろく徳とぞれり  
りのあるハ蒜とありてこそ其功効おろく徳とぞれり又仙方に  
南燭の汁とて飯を製する法ありてこそ名と著結  
飯といふと其功効のぞくことめでしき業あり  
今時人の神は飯を憚るに南天の葉と名もはゆる  
るべし

燕菓子に捨葉を置く説

燕菓子とては拍葉と名もはゆるして燕子の傍  
頭の葉と名もはゆるし方もあるしこれのみあるとて代

の人の文意とてあるはるに思へどそのわらに松拍  
の凋めるに後とてこそ標を廢めざるハえ止のことと  
は拍葉とてこそ酒は後し用ひ方たやもわら  
おぞ強目は拍葉はまてて失血の病を作し力を  
弱くし氣と益し人をして氣を弱し耐し女濕痺  
と名もはゆるし其を殺し人よ益わりとるこめで  
つたりのあるをありとて又側拍葉と  
といひ膳船と名もはゆるしかへてと削り又本邦の古風  
は酒を飲む時まは拍葉をとりてあり

今も伊豫の隣  
津軒には送船















蜀黍餅と淋病の薬ありといふことなることありて  
 蜀黍の根より功効ありしこと本草に記すことありて  
 ようての佐使あり然れども実よりその功あり

痔と淋病ハ薬より治すこと云

俚俗に痔も淋病も皆冷より成るものと云ふは  
 おり大なる誤りあり又痔も淋病もに熱毒より作  
 ること各家の病論にあり然ることを思ふに病  
 りても淋病も痔も冷より成る時ハ一倍も又冷  
 候よりより成るは理ハ分と云ふは八月熱ハ

と温むれば何となく成るなりと云ふは人の  
 股冷やふ冬ハ暖くありて知るべし  
 井の底の夏ハ冷やふ冬ハ暖くありて知るべし  
 同上なり  
 他け番椒などの熱のおと食すればはよく治す  
 よて熱毒の病ありしこと云ふべし

淋病ハ薬と思ひて云

世に薬ハ淋病の毒ありしこと云ふは禁する  
 ことありて  
 淋病ハ小腸と膀胱の腑の熱毒ありしこと云ふは



ハ微こくくををううて熱あつと去おとす大小腸ちうちうと利りすくくなり  
ててくく小便せうべんと逐おすするるののああららぶぶここごごと好このここの用もち  
ゆゆべべささららなり

蔞かハ山椒えんの毒どくと瀉げとといいふふ説

世よよよひひ修しゆへへてて莞わんハ山椒えんの毒どくと解げすすりりとて干山椒かんざん  
とつつひひは先せん尋じんの上うへよよををささ又またハ蜀椒しやくは噎ひすすりり時とき焼やく  
れれと食くふふりりつつりりれれ俗ぞく流りゅうとて本ほん按あんるるここととあり  
或ある人ひとののつつららひひじじりり何なに系けいととるるりり利り口こう考こうの  
多たくくハ干山椒かんざんと毒どくををたたけけりりをを傍たもとある人ひとは念ねんぬぬとと坐ざ

よ尋じんの上うへよよりりくくいいつつれれて蔞かハ山椒えんの毒どくと瀉げとといいふふ説  
と毒どくををたたけけりりをを傍たもとある人ひとは念ねんぬぬとと坐ざ  
一ひと犬いぬ虚きよと吠わいへへ万まん犬いぬ突つととつつたたららひひありりとと死しすす  
ぬぬれれととありりよよ細さい事じとといいふふもも食くへへ人ひと命いのちののかかるる  
不ふ苟こう且かつハ巴は龍りゆうととううぐぐええんんととてて誤あやまりりとと子こ裁さいの下した  
ハ贈のことと君きみ子このの信しんじじべべとと不ふありりととてて蜀椒しやくの毒どくハ中ちゆうに  
ハ方ほうハ金匱きんけい要略ようりやくハ肉桂にくけいと茶ちやト服ふくと又また蒜しんと食く  
ハ小せう豆とう又またハ地ち漿じやうハ土つちととありりととてて海うみかかささににううて  
ハ豆まめ豉ぢの汁じゆう並ならびびハ豆まめトと用もちゆゆべべとといいつつ



紙園の氏子ハ莫凡と禁ずりとの説

俗談ハ紙園の法政ハ凡の紋として胡凡の切口を  
るよよろて氏子これを念へば口くま又ハ瘡とふ  
るよよろて氏子これを念へば口くま又ハ瘡とふ  
神の法紋ハえわんんんこの紋ハ凡の字かゝるす職  
衆装束の法抄ハ何をも窠の字と書し窠ハ字  
書に多乃巢とほせり窠の紋ハ鳳凰の巢ハ多  
るりのよて一名と鳳窠といふと凡へりこれぢ  
てた紋あり及よ友位よりまた方の窓紋の飾と

装束の地政等よわやくつりさて又胡凡ハ本葉網  
目よ多く念すハ瘡と病ニ虚熱さうのがり瘡疥  
と發ととわれを紙園の氏子あらずとも人よよろて  
中よとるへりあ紋よて窠とわりとせば巴ハ  
ふと衆ハ紋ハ水とも飲ひまじや

鼠麴の核と喰へば人と壽びといふ説

世上よ麴の核と喰へば鼠ハ人と壽て毒とあは  
いよといまむとも由縁と知れず人よ附く鼠ハ鼯鼠  
一名ウマとして各別のものありなま子鼠目よ陳彦窓が云







眼爛々としてるたぐひあり

黒猫と積の茶といふ説

純正の猫と積の茶といふのは本茶目も臙仙が壽域  
祿方を引いて心下の鬱瘕を治する方に  
黒猫の尿と灰を焼て方寸七と一寸四方の酒をして一日  
に三交づ用ゆればわりこれとせうはえていふあり

男女の積は左のうりわきといふ説

俚云よ男と女の積聚は右左の在りてうりわ  
のかりめるといふこと俗説ありえとせうはえていふあり

陽うそて氣と王どり婦人の強うそて血と王どるりの  
あるにまてて人の力のたは血は属し右は氣は属  
するといふこととせうはえて好悪わりとらぬ方あり  
左積ハ男女とも右に右はつるを念積といふはつるを  
血積といふ中よわると積積とすりて丹溪の説  
うそて先大概くのごとくまうれどもこれに返じこと  
まうれ

積の患疝氣の患癰疾の患といふ説

俗の云よ積の患といひ又疝氣の患といふこと











已<sup>あめ</sup>取<sup>り</sup>よわひ又<sup>また</sup>ハ<sup>あま</sup>山<sup>やま</sup>中<sup>なか</sup>を<sup>も</sup>の<sup>ち</sup>旁<sup>わき</sup>宿<sup>やど</sup>よわ<sup>ろ</sup>ろ又<sup>また</sup>ク<sup>く</sup>  
 湯<sup>ゆ</sup>を<sup>ゆ</sup>浴<sup>ゆ</sup>衣<sup>い</sup>と<sup>も</sup>若<sup>わか</sup>り<sup>ひ</sup>ハ<sup>ま</sup>生<sup>なま</sup>地<sup>ち</sup>形<sup>かたち</sup>卑<sup>ひ</sup>さ<sup>も</sup>不<sup>ふ</sup>を<sup>も</sup>る<sup>よ</sup>飛<sup>と</sup>て  
 濕<sup>し</sup>之<sup>の</sup>入<sup>い</sup>る<sup>る</sup>を<sup>も</sup>濕<sup>し</sup>中<sup>ちゆう</sup>と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>是<sup>こゝ</sup>外<sup>がい</sup>形<sup>かたち</sup>と<sup>も</sup>て<sup>か</sup>外<sup>がい</sup>より  
 入<sup>い</sup>る<sup>る</sup>濕<sup>し</sup>氣<sup>き</sup>あり  
濕熱とんまりの氣久しきとまハ蒸せてか  
めりありくより水のいよりたぐひこれ濕  
 又<sup>また</sup>瘥<sup>ちやう</sup>毒<sup>どく</sup>の<sup>し</sup>濕<sup>し</sup>熱<sup>ねつ</sup>ハ<sup>ち</sup>よ<sup>い</sup>外<sup>がい</sup>形<sup>かたち</sup>よ<sup>り</sup>く<sup>は</sup>婦<sup>ふ</sup>欲<sup>よく</sup>は<sup>情</sup>を<sup>も</sup>初<sup>はつ</sup>  
 う<sup>せ</sup>ハ<sup>初</sup>く<sup>る</sup>風<sup>かぜ</sup>の<sup>き</sup>氣<sup>き</sup>あり<sup>な</sup>よ<sup>心</sup>肝<sup>かん</sup>腎<sup>じん</sup>の<sup>やう</sup>陽<sup>やう</sup>氣<sup>き</sup>と<sup>吹</sup>き<sup>起</sup>  
 して<sup>と</sup>邪<sup>じや</sup>火<sup>か</sup>と<sup>か</sup>一<sup>いつ</sup>ハ<sup>火</sup>脾<sup>ひ</sup>土<sup>ど</sup>の<sup>し</sup>濕<sup>し</sup>之<sup>の</sup>と<sup>も</sup>こ<sup>そ</sup>も<sup>い</sup>出<sup>で</sup>て  
かづれば濕と濕熱の毒氣とぬるつりて下痢便毒楊梅  
のゆる理あり  
 瘥<sup>ちやう</sup>と<sup>も</sup>く<sup>く</sup>ふ<sup>ふ</sup>く<sup>く</sup>す<sup>す</sup>なり<sup>ら</sup>内<sup>ない</sup>傷<sup>やう</sup>の<sup>し</sup>濕<sup>し</sup>熱<sup>ねつ</sup>と<sup>も</sup>て<sup>ち</sup>内<sup>ない</sup>より

傷<sup>やう</sup>あり又<sup>また</sup>酒<sup>しゆ</sup>肉<sup>にく</sup>仲<sup>ちゆう</sup>膩<sup>に</sup>と<sup>好</sup>嗜<sup>し</sup>て<sup>こ</sup>濕<sup>し</sup>熱<sup>ねつ</sup>内<sup>ない</sup>に<sup>積</sup>り  
 流<sup>なが</sup>して<sup>瘡</sup>癩<sup>ら</sup>腫<sup>しゆ</sup>物<sup>ぶつ</sup>の<sup>た</sup>ぐ<sup>ひ</sup>と<sup>あ</sup>る<sup>こ</sup>れ<sup>味</sup>を<sup>擇</sup>ぐ  
 二<sup>ふ</sup>周<sup>しゆう</sup>とも<sup>並</sup>び<sup>よ</sup>る<sup>を</sup>  
 よわ<sup>ろ</sup>

右<sup>みぎ</sup>の<sup>一</sup>件<sup>けん</sup>為<sup>な</sup>世<sup>よ</sup>濕<sup>し</sup>熱<sup>ねつ</sup>の<sup>疾</sup>世<sup>よ</sup>に<sup>あ</sup>り<sup>く</sup>して<sup>而</sup>も<sup>定</sup>と<sup>ん</sup>  
 於<sup>お</sup>て<sup>醫</sup>の<sup>云</sup>と<sup>疑</sup>ふ<sup>者</sup>あり<sup>く</sup>れ<sup>よ</sup>ら<sup>つ</sup>て<sup>こ</sup>も<sup>大</sup>經<sup>けい</sup>と<sup>記</sup>せ

牛蒡<sup>ごぼう</sup>と<sup>腫</sup>お<sup>の</sup>毒<sup>どく</sup>と<sup>り</sup>し<sup>説</sup>

世<sup>よ</sup>俗<sup>ぞく</sup>よ<sup>牛</sup>蒡<sup>ごぼう</sup>ハ<sup>あ</sup>り<sup>て</sup>腫<sup>しゆ</sup>お<sup>よ</sup>忌<sup>い</sup>び<sup>と</sup>ら<sup>ふ</sup>こと<sup>も</sup>あ<sup>り</sup>  
 得<sup>え</sup>る<sup>あり</sup>な<sup>る</sup>者<sup>もの</sup>經<sup>けい</sup>目<sup>め</sup>よ<sup>牛</sup>蒡<sup>ごぼう</sup>ハ<sup>行</sup>脈<sup>まやく</sup>を<sup>五</sup>五<sup>ご</sup>



の血氣を洗ひ凡毒癰疽を治すと有り又苦麻方  
は諸の瘰癧あり半葶の根三莖をうく洗ひ煮爛  
し搗て汁を粥に入き煮て食するにまじると  
有り

牛蒡ハ陽を起し慈姑ハ骨を厚すと云況  
狸狹は牛蒡ハ骨を補ひ陽を起すと云慈姑  
ハ骨をけづると云けづると云はあつと云は  
似るなりハわおど倍よりすハ各別のことあり牛蒡  
ハ本草に久しく食すハ骨を強くし四肢の健る

らぶりを治すなりと有りによりてハ誤りありと云  
りして陽を起さるのよハ有り又慈姑ハ瘰癧は瘰  
汁を用ゆ又石淋を治すと又齒を換へ脱文を失ふ  
懷孕は忌むと有りよて然も六腎氣を厚するも  
ち有りといふるあり一痔漏帯下御音瘰癧な  
どに写し有り

水腫は商陸を用ゆり況

とて腫脹は商陸を用ゆりとハありあて  
人のよく初るものありこれに瘰癧を煮へて毒と



知らざるありりとも商陰は大小腸を利し  
臍のあ氣と疏し後の痰を治する能われどもも  
と毒薬よりて本草子。毒わりの胃の氣虚弱の考よ  
用ゆべりずとわり又金匱要畧より水をひく服す  
まば人と殺をとつれよく醫よづるは抄必をうけ  
て用ゆべり

明は魚骨のたらし方に風仙子を用ゆる法

世より風仙子の子ハ魚の骨を軟ぐるとして骨髄よ  
ぬのうら くれと香こ又餅の煮ぼろにするよ魚の口ハ毛

を入きて煮るこもあてはしうううんをぬハ風仙の  
子ハまて骨を軟ぐるりのよてこれと飲めハ魚の骨  
より先その人の骨を軟ぐるあらぬへー骨数の  
療治ハ鍼術よて即効あることあれども人をばさる  
付ハ徳いど宿砂甘草等分末して帛につくこ食こ  
汁と嚙じべりこ外草方あり

又辛のたらし方を食して口臭を治する法

五辛のたらし方を食して口臭を治する法  
本草綱目は摘要方として韭を食して口臭を治すハ砂



糲うすを解けするところの葷辛こんしんのたぐひ何なんもとも同  
じよりあり俗ぞくは艾葉あいなと焼やて香のむ八宝はふ一いちくす只ただ砂  
糲うすと食くぶぶよよここあり又また煙い去げよよ辛しんハ汚穢けがれよよアアと  
いふより得たまつつより佛家ぶつがよよここ水みづと忌いむハ時珍ときちんが云いつつ  
辛重しんじゆうの物ものせよよて食くハ悲ひと坊ぼう一いち熟じゆく食じきををれれてて  
食くふふ姪めいとと殺ころすすハ壯麗じゆうれいとと換かずずりりここととひひ故こととあり  
て禁いじじりりびびりりとと一いち

塩しほおおの塩しほ氣けとと食くよよ此この法ぽう

凡たゞそそ食くおおの味あじと細こまくくもも煮に出ですすのの一いちつつありあり魚いし考こうととあり

何なんももてて由よし速すみよよ塩しほとと出ですす一いちアア凡たゞ時ときハハ揚あげげのの茶ちやとと下くだ  
にに別わかれれよよ又また上うよよ煎あひひてて水みづよよ漬ひけけ並ならびびくく時ときハハすすここあり  
よよ塩しほ出でるるよりよりこことと又また揚あげげとと蟹かにととハハ一いち合あひひありあり何なんもも  
べべー

俗ぞく説せつ正せい誤ご夜や光くわう珠しゆ 卷まき之の中ちゆう平



俗説正徳夜光壁下卷目錄

- 室を茶と毒といふ説 初丁
- 鏡ひ目よ茶と用ひぬといふ説 二丁ウ
- 毒毒いふ茶と飲まぬのといふ説 三丁ヲ
- 寝酒を茶といふ説 四丁ヲ
- 冷あしと飲と洗ふを茶といふ説 同ウ
- 番柵と毒といひ又茶といふ説 五丁ヲ
- 雞冠の茶と後茶といふ説 六丁ヲ
- 白木槿の花の痢病よりさ説 七丁ヲ

俗説正徳夜光壁下卷目錄  
 室を茶と毒といふ説 初丁  
 鏡ひ目よ茶と用ひぬといふ説 二丁ウ  
 毒毒いふ茶と飲まぬのといふ説 三丁ヲ  
 寝酒を茶といふ説 四丁ヲ  
 冷あしと飲と洗ふを茶といふ説 同ウ  
 番柵と毒といひ又茶といふ説 五丁ヲ  
 雞冠の茶と後茶といふ説 六丁ヲ  
 白木槿の花の痢病よりさ説 七丁ヲ



紺鈴くわんすずりとて痢病りびやうと治すちる説

七丁ウ

黄痘わうたうと蛇へびと毒どくと治ちせるといふ説

八丁ヲ

炙炙あしあし肉食にくじとすすは六健ろくけんよあるといふ説

九丁ウ

腎じんと補おぎなふといふ茶ちやの説

九丁ウ

ああの濁にごととの禁いんとてすまとといふ説

十丁ウ

蕎麦そば切きりと西瓜すいかのこわわの説

十二丁ヲ

女にょの鼻衄びやうハあままててもよよとといふ説

日ウ

狐きつねとて血ちをいいひひるくとまのく説

十三丁ヲ

喉のど并ならと嚏くしゃみする時ときのまどどああひひの説

十三丁ヲ

小兒せうじとは嵐あらしと食くせせバあ瘡あざ疹あざとことこといふ説

十四丁ヲ

ととよよ咬かれれるるをち治ちするる法

十五丁ヲ

ああととささ犬いぬとあとと退ひくく粥かゆ

十六丁ヲ

害あやまの毒どくにあししるる説

十七丁ヲ

金山きんざんの毒どく氣きとあわわるる説

日ウ

狸ねことあ掛か紺くわんとあ甘かん茶ちやとあいいふる説

十八丁ヲ

串揚くわんぎやうとあ躑躅しゆくじゆく花はなとあここわわとあいいふる説

十九丁ヲ

産後うぶごとあ串揚くわんぎやうとあ思おひひとあいいふる説

日ヲ

産後うぶご三日さんじつやあ綱あなとあ用もちゆる説

日ウ



陰毒は索麩と用ゆれば安んずといふ説 廿丁ヲ

産後七十五日灸と忌むといふ説 日ウ

百花の灸の日みく一倍よすゆりといふ説 廿丁ヲ

午の日ハ灸せぬのといふ説 廿丁ヲ

卯辰辰後寅宵といふ説 日ヲ

膏育の穴と瘰癧といふ説 廿丁ヲ

三里ハ血の口といふ説 日ウ

夜光珠下卷目錄

俗説正誤夜光璧卷之下

浪華原省庵若一子輯録

寒茶と毒といふ説

世上は温茶ハ茶もて寒茶ハ毒ありといふ説

人ありこれあざ癖事ありけ得りと知しめんが

あま朱丹溪格致條論は陽有陰不足の論を著

リ局方發揮は温熱の茶は害ありくして寒冷

の茶は功わくを明せり然るもまゝ張景岳

純の大實論は陰有陰不足の論を立て格致を



此言不殊 卷之二  
駁をば賢各古聖の微言をひて世の弊を治し  
淋りんと欲して心を用ひ筆と揮ふとつども  
後じ若その云むは返してそのことと云せば根つよ  
彼を水一はを是として終よ其元を去るよと云く  
本とすりごとを識らず易の繫辭より曰く書ハ  
云とてこび去ハ意とそさど然れは列ち聖人の  
意を思ふべうらざり乎と云れぬを学ぶ者の心  
と小うして熟讀玩味と云ふありこそあつて  
の業指す難ともは能毒の二つのあこといふこと

ハ一毒氣わらぬよしく病を愈さうれを能く  
つある病あり用ひば何れも皆毒ありこそ  
つる方の病は用ひば悉く業あり故に業物ハ  
軍兵弓矢鉄炮槍長刀のごとく一兵ありありこれ  
を用ひば人と害みの益あり配刻ハ軍法のごと  
此の軍紀固と秉つて病敵を退くは故に景岳  
全書より方劑と八陣と分ちて作法と云ふなり  
是バ平生の養生ハこれ文をひくを治しあり  
又病を療治するハこれ武をひて礼を法しあり  
養生  
ハ医

正長夜七珠 卷之二







むとさハ己と修女人と修むるのたあるをといふも  
か上巳乃艾揚みの菖蒲を陽の菊花号にあられ  
茶を用ゆると壽とすつことあり  
湯年ハこと茶目といひ茶五子とのみありま

瘰癧毒の茶と飲まぬりめといふ説

世上は瘰癧毒の俗に濕毒と云ふ茶と飲まぬりめといふ  
ハ揚梅瘰癧の俗にたしりやが瘰癧治に輕粉などの大毒の毒  
茶を用ひて其効をえとせば年一年わつひハ二三  
のぼり骨節痛と出でそれより一せ廢人とぬる

しつかりこれとゆつ終りつらあり醫を學びつら老  
の以事と知つざらあり方によりつて子孫は愈  
るしつと好まど濁くは濕毒と遷去つて去元を  
術るこれ醫家の通法の法あり然るを誤つて茶を  
のまぬりめとして醫の茶と交けど病は若く却  
て妙茶を服して或ハ一病病と成る又ハ命を損  
むりのわり携びて一煎びて

寢ぬと茶といふ説

世俗は叔外とよ降んでぬを飲むと寢ぬと名



つけまご茶ありといふこと誤正あり本草綱目は  
 取内は碎ひ睡して枕は枕けば熱拂して心と傷  
 目と傷をわりぬべし  
熱拂するといふ熱がひびく  
 ちまうてとりのこむ心

冷水にて頭を洗ふと茶とのみ洗

便儀は頭を冷水にて洗ふと茶ありとして月夜を  
 帯ふありとして冷を人わりて水の道は八帳は百餘  
 衆の斐は何とてうは壽とびふぞと向へは壽は  
 外て首を覆りずと蓋ふるありて敷外を付  
 りおと被ふて寝るは毒といふありたが冷と茶

と一概はゆゆる故の誤正あり本草綱目は  
 冷水にて頭を洗ひ熱淋にて  
にえふあり 頭を洗ふは並  
 びは頭風と成る女人はむもろくを忌むと何れは  
 冷水にて月夜を洗ふも又糠のより一といふの  
 りて髪と洗ふも写しくは頭痛と病じあり髪  
 洗ふといふ海産がよふあり

番椒を毒といひ又茶といふ洗

せりよ番椒は毒ありとして食はざる人わり又  
 茶ありとして汗をうさ茶と筆めて食ふ人わ















の又十七箇條も學ぶ新方ハ大病痼疾を治すこと能はざるとわるとや

魚を肉食とすれば健はぬといふ説

俚俗常に魚を肉食とすれば健はぬといふ説  
と云ふ誤りありとて肉食ハ火と物けく燥熱と生じ病のりくありおあり國後ハ厚味ハ實ハ毒と勝はるといふもはぬあり田家ノ考ハ藤食とて力と働く人の至病とて虫食ありといて知るべしハ幸と格致作傳の飲食箴ハ云づく

山野の實は淡味是病一勅作衰ハと云は力も亦

安一と評よあることありむも形火勅ハやと云ふらば魚を厚味と云ふべしハゆへハ養老論ハ肉食幼壯ハ及がごとく十條ハ方ハ肉を食ふと何り居と安しとて力と働むと云ふと云ふ人ハ行ふて宜しうらば厚味ハ氣を困て脾胃の氣の運めわくとぬと云ふと後々の病を他とつしむべしとあり命を繋ぐ食ありとて却て力と害ハ人欲の如くありと云ふと云ふハ肉



のたぐひと茶ありと飲ゆりとも風味わいさりの  
やうに飲む食ひいせまう味ひの美ありにわけを  
て毒とも茶のやうに思ひぬーおろくいひあは  
ハナリーさうあり孟子は曰く飲食の人ハ別  
らんれを賤んむと小とを大と失ふ  
があまりとふれば得れあり

腎と補ふとらふ茶の説

齒を補腎の茶とて人貧乏てられを服と  
孫子壯子の人乃用ゆること水の外の儀あり

そ及ハ世俗の云は腎を益して子孫をなすための也  
るくは丹劑ハ何れも腎の火を盛うて陽  
乃と起と茶方ぬが元陽の火の衰へ方老人虚  
人よ用ゆべー常のさう人これを服すとさハ  
其陰の水激くに潤てて壽命を延め其横の死  
をさうとすもやうあり強へバは燒の燒を強  
てかさうつらうと強ひ強くぬまうと覺  
ゆれども却てゆるやう濁て火の減ゆらう同ト  
去陰元陽の事ハ醫者の眼目とて容易く不述



ごうごう一たよの腎茶の人と得るこもろこも百方  
發揮その古書よかり、此より

并よ蜜よて煉て細くする茶よ万一合ひり

とよありの得るもの生茶高昔餅うれりハ皆蜜

よ一合ひりあが外の茶粉よ一合ひり

もは分ハ思ひど一製法の仕や茶の紐わら

せよとてうまりぬあどりよハ小人の秘也

ありの濁よとの禁よて澄よとのみ

水の渾るるにの禁を入れく澄るるより人の

知れるよりよてこも水用よては或人の禁よ

て澄せり方ありて合よと仕り茶を立りよ茶

の文燥を解り方ありてよあまらるるはむべきあり

水を澄るる茶綱目よ云り雨の後あ渾ると

ハ桃仁杏仁を挿り入ててそれを澄しむべしとわ

蕎麦切と西瓜のよ一合ひり

茶綱目よ西瓜ハ油餅とだんごのあり

食すれハ脾と損ずると何りて蕎麦の尻あり

とよども西瓜と蕎麦切を同食すれハ腹脹



ころころのどろろ 疥癩<sup>せいかい</sup>びこもききくく吐<sup>と</sup>厚<sup>こう</sup>  
 すくくを吐<sup>と</sup>ぎく死<sup>し</sup>瀬<sup>せ</sup>更<sup>もう</sup>はわりこれ古<sup>こ</sup>人の<sup>ひと</sup>  
 いまごころどろろふれどもは二物<sup>ふたもの</sup>おま<sup>ま</sup>ずりこそ<sup>こと</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>  
 りあり又<sup>また</sup>ころころに苦<sup>く</sup>苦<sup>く</sup>麦<sup>むぎ</sup>切<sup>き</sup>と西<sup>せい</sup>風<sup>ふう</sup>のけ<sup>け</sup>は<sup>は</sup>後<sup>ご</sup>とよ<sup>よ</sup>  
 志<sup>し</sup>づく<sup>く</sup>つ<sup>つ</sup>りて<sup>て</sup>雲<sup>くも</sup>さ<sup>さ</sup>り<sup>り</sup>本<sup>もと</sup>の<sup>の</sup>ど<sup>ど</sup>ろ<sup>ろ</sup>は<sup>は</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>る<sup>る</sup>も<sup>も</sup>  
 の<sup>の</sup>あり<sup>あり</sup>  
は一件<sup>いっけん</sup>わまふく人の<sup>ひと</sup>の<sup>の</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>み<sup>み</sup>あ<sup>あ</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>こそ<sup>こと</sup>ま<sup>ま</sup>実<sup>じ</sup>  
とどろろ人<sup>ひと</sup>の<sup>の</sup>い<sup>い</sup>ろ<sup>ろ</sup>ご<sup>ご</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>く<sup>く</sup>よ<sup>よ</sup>こそ<sup>こと</sup>よ<sup>よ</sup>記<sup>き</sup>を  
 女の鼻<sup>はな</sup>衄<sup>ぢ</sup>は<sup>は</sup>愛<sup>あい</sup>よ<sup>よ</sup>見<sup>み</sup>て<sup>て</sup>も<sup>も</sup>よ<sup>よ</sup>こ<sup>こ</sup>と<sup>と</sup>し<sup>し</sup>み<sup>み</sup>流<sup>りゅう</sup>  
 俚<sup>り</sup>云<sup>い</sup>よ<sup>よ</sup>女<sup>にょ</sup>の<sup>の</sup>衄<sup>ぢ</sup>血<sup>けつ</sup>は<sup>は</sup>愛<sup>あい</sup>よ<sup>よ</sup>見<sup>み</sup>て<sup>て</sup>も<sup>も</sup>よ<sup>よ</sup>こ<sup>こ</sup>と<sup>と</sup>し<sup>し</sup>み<sup>み</sup>流<sup>りゅう</sup>  
 若<sup>わか</sup>て<sup>て</sup>そ<sup>そ</sup>授<sup>おづ</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>は<sup>は</sup>ら<sup>ら</sup>あ<sup>あ</sup>つ<sup>つ</sup>と<sup>と</sup>ど<sup>ど</sup>て<sup>て</sup>女<sup>にょ</sup>子<sup>し</sup>の<sup>の</sup>い<sup>い</sup>ろ<sup>ろ</sup>ご<sup>ご</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>く<sup>く</sup>よ<sup>よ</sup>記<sup>き</sup>を

あれが血<sup>ち</sup>と<sup>と</sup>見<sup>み</sup>て<sup>て</sup>疑<sup>ぎ</sup>さ<sup>さ</sup>せ<sup>せ</sup>ま<sup>ま</sup>ど<sup>ど</sup>死<sup>し</sup>こ<sup>こ</sup>あ<sup>あ</sup>よ<sup>よ</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>や<sup>や</sup>又<sup>また</sup>男<sup>おとこ</sup>  
 ハ<sup>ハ</sup>氣<sup>き</sup>よ<sup>よ</sup>條<sup>ぢ</sup>と<sup>と</sup>ろ<sup>ろ</sup>り<sup>り</sup>女<sup>にょ</sup>ハ<sup>ハ</sup>血<sup>けつ</sup>よ<sup>よ</sup>條<sup>ぢ</sup>り<sup>り</sup>わ<sup>わ</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>ら<sup>ら</sup>ま<sup>ま</sup>と<sup>と</sup>て<sup>て</sup>  
 驚<sup>おどろ</sup>こ<sup>こ</sup>者<sup>もの</sup>の<sup>の</sup>い<sup>い</sup>ひ<sup>ひ</sup>出<sup>で</sup>さ<sup>さ</sup>る<sup>る</sup>や<sup>や</sup>衄<sup>ぢ</sup>ハ<sup>ハ</sup>男<sup>おとこ</sup>女<sup>にょ</sup>の<sup>の</sup>い<sup>い</sup>ろ<sup>ろ</sup>ご<sup>ご</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>く<sup>く</sup>よ<sup>よ</sup>記<sup>き</sup>を  
 ハ<sup>ハ</sup>一<sup>いっ</sup>條<sup>ぢ</sup>ハ<sup>ハ</sup>婦<sup>ふ</sup>人<sup>にん</sup>の<sup>の</sup>衄<sup>ぢ</sup>血<sup>けつ</sup>よ<sup>よ</sup>ハ<sup>ハ</sup>條<sup>ぢ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>は<sup>は</sup>ら<sup>ら</sup>あ<sup>あ</sup>つ<sup>つ</sup>と<sup>と</sup>ど<sup>ど</sup>て<sup>て</sup>  
 ハ<sup>ハ</sup>鼻<sup>はな</sup>と<sup>と</sup>ろ<sup>ろ</sup>り<sup>り</sup>出<sup>で</sup>る<sup>る</sup>病<sup>びょう</sup>ハ<sup>ハ</sup>わ<sup>わ</sup>り<sup>り</sup>是<sup>こゝ</sup>ハ<sup>ハ</sup>衄<sup>ぢ</sup>と<sup>と</sup>て<sup>て</sup>い<sup>い</sup>ろ<sup>ろ</sup>ご<sup>ご</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>く<sup>く</sup>よ<sup>よ</sup>記<sup>き</sup>を  
 ハ<sup>ハ</sup>わ<sup>わ</sup>り<sup>り</sup>は<sup>は</sup>お<sup>お</sup>よ<sup>よ</sup>男<sup>おとこ</sup>と<sup>と</sup>う<sup>う</sup>り<sup>り</sup>衄<sup>ぢ</sup>ハ<sup>ハ</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>は<sup>は</sup>ら<sup>ら</sup>あ<sup>あ</sup>つ<sup>つ</sup>と<sup>と</sup>ど<sup>ど</sup>て<sup>て</sup>  
 紙<sup>かみ</sup>よ<sup>よ</sup>て<sup>て</sup>血<sup>ち</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>じ<sup>じ</sup>ら<sup>ら</sup>お<sup>お</sup>や<sup>や</sup>の<sup>の</sup>流<sup>りゅう</sup>  
 衄<sup>ぢ</sup>血<sup>けつ</sup>ま<sup>ま</sup>ハ<sup>ハ</sup>切<sup>き</sup>紙<sup>かみ</sup>と<sup>と</sup>も<sup>も</sup>血<sup>ち</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>葉<sup>は</sup>の<sup>の</sup>用<sup>もち</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>は<sup>は</sup>ら<sup>ら</sup>あ<sup>あ</sup>つ<sup>つ</sup>と<sup>と</sup>ど<sup>ど</sup>て<sup>て</sup>  
 何<sup>なに</sup>ハ<sup>ハ</sup>紙<sup>かみ</sup>と<sup>と</sup>お<sup>お</sup>よ<sup>よ</sup>て<sup>て</sup>血<sup>ち</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>じ<sup>じ</sup>る<sup>る</sup>法<sup>はふ</sup>わ<sup>わ</sup>り<sup>り</sup>  
これ衄<sup>ぢ</sup>の<sup>の</sup>い<sup>い</sup>ろ<sup>ろ</sup>ご<sup>ご</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>く<sup>く</sup>よ<sup>よ</sup>記<sup>き</sup>を  
れども人の<sup>ひと</sup>の<sup>の</sup>い<sup>い</sup>ろ<sup>ろ</sup>ご<sup>ご</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>く<sup>く</sup>よ<sup>よ</sup>記<sup>き</sup>を



わ... 法まづ... 血の... 押へ... 洪範九疇の法を...

	日	第	
			日

夏の禹王の洪範九疇の法を... 洪範九疇の法を...

その畫州井地の圖... 水あり失血ハ血の高よ... 作ぐべー秘ぎどー

呪逆... 呪逆...

呪逆... 鼻の息と... 紙捲と入れて...



うれまゝなま後よわくば王宇泰が云りく呪逆ハ  
 良ら内経よ所謂嘖也 呪逆も嘖しうんげり 紙摺と用て鼻  
 鞘セバ使ら嚏る嚏るとさハ剌らまどころあよ己び或  
 ハ口鼻の氣を閉ぢこれとて息あううーひるも  
 赤まよ己び或ハ冤逆賊と作て大いよ驚き法一  
 ひるも赤己びとわりこれハ漢理を同ドウするの  
 自然よ妙りのを又を作嚏る時ハ呪とてくまめ  
 ともくえんめともりよまおと寝てト下まものも  
 のハもろくくといふありぬ又他の己が寝るとそれ

ちまひるといひ又まどあうぬばわりとていふこと万  
 家よまのぬらむさあひひもくとくは漢を流然草  
 よろさめくとまどあひひることわづをまうたが  
 そ中てあうこと久し死と見へり小説家の書よ  
 嚏る時の呪よ休息万命急く如律令と唱よ  
 ることいふことわりは息万の及 ネ後続のえ 産あは休産  
 命と唱一休息万命といふべきを撰批に休息  
 良惠といひあうせらあうどー

小思よ鼠を食りセバ痘疹うるといふ説







正言秘法 卷之十  
神童ありて胎瘡の術を授く瘡癩せらる見  
の疥癬を死ていませ瘡癩せらる見の鼻孔は  
入るもばらねよふりておぬる瘡癩せらるを神  
瘡と名づけ又胎瘡とよむどろくしとわら  
まらあしとわり

馬は咬む方を治す法

ろくよ咬むる者はいそ熱ふこと火よそ燻ぐごと  
く燻れ苦しじりのありそ水をいじり水よ外の  
隅よりあを飲ましじりよ夕ら熱去つて痛

と減ずることそねわり馬は乾よ象つて離火  
よ位する高あり升の形ハ方けして伸よ象る  
隅ハまる隈中の隈あり且次水を以と離火を  
煮すかによりてそ熱毒すそやうよ去るありさ  
て又景岳全書よる齒莖を搗爛しして煎ど  
服し咬むる方底よハ栗子を嚼み碎して煮  
てうしとわり

悪こ犬を退くる術の呪

俚云よ犬を退くるものどあひよ戌亥子丑寅と



指を座して巻を握るとりよハ捲るまふありは  
淋のこハ損碑録よ思へたり九そたをひきて  
悪犬よ遇りて昂ちたの子の大拇指をひて寅の  
上を指し氣を吹くこと一は輪として戌の上よ  
つてうねを指と犬即ち退伏をとりあり

是ハ骨のごとく大指のこい  
よて子より尻指を去て  
寅のふよて寅といひく  
息を吹さうけそふり



卯辰巳午と次第にうそくめぐり戌とわくるを  
押して子と握るとこハ犬すまひち退伏するあり

害の毒に申る説

在上よ害の毒氣よ申して人の換ずりて交  
くわりありありはべー是地中の陰毒あり久  
しく開らざる害まる濕氣こりりありど交袂の  
以ハ積又よ用んまどーハ骨綱目よ夏月ハ陰  
氣下にわりへるべし毒わつて人を殺ま  
けり葉末子等よをひり刃へたりをくハ廣益



俗説辨は輟研録を引いて古井は毒のつることと  
 記せりことを法は同トケルがうは累を又と毒は  
 中より方考ふ多し引わけて蘊香を常用ゆべ  
 一法は法つ

金山の毒氣は申る説

まて金根洞山の坑の採りやうと風の出  
 ざりふ風ぬさの穴を突けられば陰氣こり  
 て煙滅へ入弊るるりわりを俗は氣終る  
 とつふれも亦ちよりの害の毒は同ト又金

根洞山の洞窟の氣は觸れ胃を害して病む者の  
 状ハガの又黄むと咳嗽いで痰粘く濁くは備きて  
 三つ痛むむすにぬるありは病は茶の粉よてまら  
 める團粉の塩りやと好む者ハ法せばいしむと病せ  
 まらざるちよと作する一方わり解烟散と  
 一方ハ外よと白湯は攪て日々に用て作すべし

鯉は胡椒鮓は甘草といふ説

俚云は鯉は胡椒をこしわひとしふことと考て  
 是れ説のさうありな事細目よ鯉魚ハ天門



冬辰砂冬葵子よこーわよと有り又犬乃肉  
葵葉よ食食すこーだとりわごと形虫の食  
およわらずはおよこーわひのあー又鱒よ甘菜  
といふの砂糖のえちごあり本菜よ新魚ハ砂糖  
と同どく食すは疥の虫とせと蒜よ食すハ  
ハ熱いで芥菜と同食すは疥疾とまづらふ類  
知麻猪肝猴と同どく食くハ瘰癧とせと  
何り は中よも倭の 又麥門冬のへる菜と服す人  
ハ別して忌べーハ別同食すとハ人々害とつ

ーじごさりあり

串拵と躑躅花と食ひ合せといふ説

俗よ串拵と躑躅花と同どく食くハ人と害と  
ちといふハ串拵よお及すくおわらば躑躅よ毒  
何りねあり拵よ花葉ともよりらつてーハ似く花  
の文の葉ありをねんげはドといふハ即ち  
菜よ羊躑躅といふりのあり別して毒わり万葉の  
歌よ

とるはあげ 玉回拵野乃は糸と約



擲つてけりて碎木花さく

とよめるもそ毒ありりといふに碎木ハ倭子  
しつわせがの本あり或人のしつハ野の奥の玉  
川のあと後る毒水もあ上りよう碎木あつて  
至ては痛まありとぞまことにあやむやあむ

産後ハ串掬を忌むといふ説

婦女のしつひつて産後ハ串掬を忌むといふ  
しつ強まあり産實方ハ産後の款送ぐんせいの乳乳  
是心煩々と治する方ハ乾掬とほろがこ又用

ひく切碎さあよ煮てけしと呷しむることわり

産後三日めハ綱を用ゆる説

綱ハ本名綱目よ出む棘鬣魚といふ名ハ因書に  
出たりこの名は又綱の字ハ倭字あり  
栗田夫人といふ人入唐の時華人よ倭くらけり  
り冊府元龜よ裁せりといふに  
服の和名抄よ六崔禹錫が念強よ出たりといふに  
もそ書作りしに世俗産後の三日めハ綱  
を用ゆるといふと今考ふるに綱ハ瘀血を逐ひ



乳汁と魚びろりのあつゆは一軟湯としてころろ  
よ方寸むろりと炙る用ゆねどろく無病と下  
乳もよくころろとろろとあり多く用ゆねば中ら  
りのあつゆ一

産は除んで索麩を用ゆね産安といふ説

佐依の云は産ぬのけづさう方耐索麩と食りしれ  
は産一やまをといふこと写しは是は麩の温  
めるは使をいそ製一ろりのあつゆ血と湿め清くふ  
すろといふ意よて懸さ若の胎兒ころろ出ろりあり

先醫の食を忌禁するの儀惟除産産はともは麩を禁  
ずるとわり止菜と服するよ忌びのなるは用ゆね  
産は七十二日のうち灸と忌びといふ説

せとよ産後七十二日のうち灸とせぬものといふ  
火と思ひとろろとろろと終るとろりのあり火  
と忌びとろろと邦の西風よて糲まて万同火と思ひ  
ろろと糲るよと産後わりて仔細人の産後百  
日素更あつは法行へハ七十二日社素とゆかすは  
又灸作ろと糲わろりよて一穴よ三社よてハ幾



而もその様はあり一曰社以てハ七日未だせどこれ  
らと少保りて其のくらハ灸せぬと云ふ方あり  
さて産後血虚は虚をくくハ血海は灸一或  
ハ産後腹痛多痛ハ石園は灸一又ハ血痛止  
まはれ脈を流りて痛じも又産後の淋病をも  
氣海を灸と云ふハ産後の病は随ひて灸法を  
ること法家の流ぬりあり行ふことなるれ

四花の灸と日よく一倍の灸と云ふ流

惟去はに花の灸ハ六穴ともハ初日は七壯づきこれ

より日くは一倍坊は七月すゆをなははといふこと  
一曰の得かりは流ハ十薬外書は附むるハの孫子  
中がに花の法は日別者七壯より二七壯は五五  
に灸して一曰壯或ハ一曰十壯は五五とすける  
と云ふ流より一曰のありさて四花患門の灸法ハ  
夜の中書侍部崔知煇より作すりて  
崔氏が別録の身七巻は  
此よりと云ふ 一曰正況ハ王憲が外臺秘要  
秘要ハ云ふ 崔氏が別録の身七巻は  
生方者ハ云ふ 資生堂醫學入門 鍼灸聚英  
類聚圖説ハ云ふ 裁むるハ云ふ 流おぬと云ふ 同ドク















正徳元年

俗説正徳夜光登 卷之下

大尾

右夜光珠去未五月十一日所願申上同月  
所免被乃成下板行仕作

享保十三戊申年正月吉日

心齋橋筋傳馬町

秋田屋徳右衛門

同筋順慶町角

河内屋茂兵衛

攝陽書肆

同筋中船場町

大塚屋惣兵衛

版開



